

論壇

異例の金融政策新語次々

「金融政策についての報道を追っている、聞き慣れない用語がたくさん出てくる」。そういう感想をお聞きすることが多い。ゼロ金利やマイナス金利はまだ何となく分かるが、イールドカーブコントロール、フォワードガイダンス、テーパリングなどと言われても、何を言っているか分からないという人が多いだろう。

実は、こうした用語は少し前までは、専門家の間でも使われることはなかった。景気が悪ければ金利を下げ、景気が過熱すれば金利を上げる。かつての金融政策は単

伊藤 元重 (国際経済学) 学習院大教授

純なものだった。しかし、日本でデフレが長引き、米国では2008年に50年に一度という危機と言われるリーマン・ショックが起き、そして現在コロナ禍が世界経済をどん底に陥れている。これ以上金利を下げるのが難しい中で、日本銀行を含めた主要国の中央銀行はこれまでは行わなかつ

たような金融政策の運営をしてきた。残念ながら足元ではドル株という感染力の強いウイルスが広がり、景気回復への期待感が後退している。

テーパリングの時期に注目

そうした異例とも異次元とも言える金融緩和策のおかげで、経済がこれほど悪いのに株式や不動産の価格は高水準を維持している。企業の倒産件数も低い水準で抑えられている。ただ、いつまでも異

常なまでの金融緩和を続けているわけにはいかない。主要国は極端な金融緩和からの離脱のタイミングを探っている。その鍵となるのが新型コロナウイルスの感染収束の見通しである。少し前まではワクチン接種がある程度広がれば、感染が収まり景気は急回復するという楽観論が

くことである。現状では、主要国の中央銀行は政策金利がゼロ近くまで下げられているのに加えて、膨大な額の国債の購入を続けて市場に資金を流している。

国債購入減 米国が先陣か

こうした過剰な金融緩和からの脱却に一番早く動くと思われるのが、米国である。まずはテーパリングで国債の購入を減らしていき、その後で政策金利を引き上げていくというステップを踏むだろう。市場は、米国の中央銀行がどの時点でテーパリングに踏み切るのか注目している。それがその後、続く金融政策の正常化への号砲となるからだ。

通しによって揺れている。感染が収まっていけば景気の回復も早いので、テーパリングの時期も近い。最近まではそう見られていた。ただ、ここに来てデルタ株の猛威が収まらず、テーパリングの時期の予想は少し後ろに伸びているようだ。

この先の感染状況の見通しは不透明なので、テーパリングの時期の予想も早まったり遅くなったりするだろう。時期はいつになろうと、どこかの時点でテーパリングは行われる。そしてそれは、世界経済が異常な金融緩和から抜け出す重要なタイミングとなる。株値や不動産価格にも、そして金利にも大きな影響が及ぶ。日々の報道の中でテーパリングへの言及に注目してほしい。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。